市川左團次の1924年中国公演

姚　紅

一、はじめに

2代目市川左團次（1880～1940）は、初代左團次の長男で、常に演劇革新の先頭に立ち、歌舞伎の近代化に尽くした役者であった。「毛抜」「鳴神」などの歌舞伎十八番の復活上演に力を注ぎ、のちに新歌舞伎と呼ばれるようになった「修禅寺物語」「元禄忠臣蔵」などの作品も積極的に上演した。さらに、小山内薫とともに自由劇場を主宰して、シェイクスピアとイプセンの劇を上演した「新劇」の先駆者の一人でもあった。また、ソ連邦対外文化協会の求めによって1928年8月に一座を率いてモスクワとレニングラードで一か月の公演を行った。このソ連公演が、初めての歌舞伎海外公演とされている。

しかし、左團次にとっては、1928年ソ連公演が最初の海外公演ではない。彼は自伝の中で、南満洲鉄道（略称「満鉄」、1906～1945年）の後援で社員慰安の為という名目で1924年8月に大連を振出しに、奉天、撫順、長春、ハルビン、京城、安東、大邱、釜山を巡り、天津、北京、上海を経て、10月に長崎に帰国したと述べ、1924年中国公演に触れている[1]。

近年、京劇と歌舞伎の文化的交流に関する研究の中で、1924年北京における梅蘭芳と左團次との親交に言及した研究[2]があるものの、梅蘭芳と会見する前にすでに満洲で行われた左團次の歌舞伎公演の詳細はまだ解明されていない。

本稿では、中国で発行された『大連日報』[3]『満洲日日新聞』[4]『順天時報』[5]などの新聞記事を調査し、従来の研究で見逃されてきた左團次の1924年中国公演の実施経緯・演目や現地の観客の反応を明らかにしたい。また、左團次がこの公演を通して京劇の名優である梅蘭芳からどのような影響を受けたのかを検討していきたい。

二、公演の目的と日程

まず、公演の目的を見てみよう。『読売新聞』1924年7月9日5面に「左團次が支那へ　日支親善の目的で　一座をつれて今月下旬に」と題した記事が掲載されている。満鉄総裁の安広伴一郎を発起人とする企画によって、日本駐在の中国大使から支持を受け、左團次一座が中国各地を巡業する計画が報じられている。さらに、この記事で左團次一座の公演が民衆芸術の上から両国の親善を深くしようという目的で、松竹の外交部長である山森三九郎がすでに満鉄本社と中国の日本大使館と総ての打合せを終えたことも報じられている。満鉄の九代目総裁である安広伴一郎が1924年6月22日に就任していることを考慮に入れると、この公演は彼の就任を祝うイベ

ントの一環でもあると考えられる。

1924年10月に創刊された雑誌『芝居とキネマ』の「創刊の辞」の下には、高原慶三による「左團次一座の満鮮行　大歌舞伎植民地巡業のうらおもて」という記事が載せられている。この記事では、満鉄の社員や幹部連中が「植民地暮らし」の中で「浪花節芝居」か「古ぼけた活動位」しか見られないという話から、左團次一座が満鉄から経済的支援を受けて満洲と朝鮮に渡ることになるまでの経緯を説明している。

高原慶三の文章では「満鉄の機密費から多少の補助」もあったことが言及されている。その機密費の額については明記されていないが、『日出新聞』1924年8月6日3面の記事「支那巡業に左團次の鹿島立　一行八十余名の大掛りで　大連から北京上海へ」で、「満鉄ではせめて其半を応援しようと此一行に限り半額の乗車券を出し社員慰安の為め見物に便宜をはかる」と報じている。さらに、満鉄は大連公演の期間、旅順からの観客のために、特別に午後12時30分大連発旅順行きの臨時列車を増設した。満鉄は経済や交通移動などの面から左團次の公演を全力で支援している。

前述した『日出新聞』記事では、この公演の「目的は在支那人の慰安日支両国の親善もあるが大体は松竹の興行範囲拡張の素地をつくるのが主眼だ」ということも記されている。1902年に白井松次郎と大谷竹次郎が設立した松竹は、新富座や明治座など多くの劇場を傘下におさめ、特色ある俳優陣を揃えて興行を行って、1929年になると日本国内における大劇場の歌舞伎公演の全てを担う重要な存在となった。しかし、1923年9月の関東大震災で、松竹は歌舞伎座をはじめとする東京の劇場が烏有に帰し、壊滅的打撃を受けた。震災後に、松竹は焼けなかった施設を借りて興行し、東京の役者を災害のない関西に派遣して再建に向けた。このような状況の中で、1924年に松竹は満鉄の経済支援を受ける海外公演を大きなチャンスと見なし、相当重要視しており、「総掛り十五万圓の見積りでこの旅行を企てた」[6]のである。

左團次の中国公演は日本国内で期待されているとともに、満洲の演劇関係者からも注目されている。『満洲日日新聞』と『大連新聞』は同じ7月19日の紙面で8月開演の大連公演を予告している。満鉄の機関紙としての『満洲日日新聞』は、8月1日から13日まで井田潑三「明治大正演劇史上に於ける市川左團次の地位」を連載し、観劇制度の改革・新歌舞伎の発展・新劇運動など左團次の貢献を大いに宣伝している。一方、『満洲日日新聞』8月11日朝刊2面の「満日評論」に「市川左團次に與う」と題した評論が発表されている。作者の愛静生は、左團次の来満を歓迎しながらも、「歌舞伎役者としての舞台技巧は零である」と酷評している。文章の最後で次のように記している。

> 茲に於て私は左團次に勧める行詰まる将来を展開すべく、更に新天地を開拓せよ。満洲に来った（ママ）のを幸に、支那の演芸から何ものかを掴んではドウだ。僅か数十日の満洲巡業に、固よりその完璧は望まれぬであらうが支那の演芸が有する特殊な色彩と調子とを感得して、そこに新しい芸術を創造して欲しいのである。真の日支親善は政治家や学者の良く達成し得る所でない国民的に融合し連絡せねば駄目なのは知れている。それには芸術が何よりの捷径である。而して演劇に於て最も効果の著しいのを思わせる。私は左團次が満洲巡業中、支那の国民性と芸術を研究して、新しい日本と支那の思想、感情を融合し調和する新芸術の創造に、

新生面を開拓せん事を切望したい。

左團次は 1912 年に父親から継いだ明治座を売却し、東京で最初の松竹専属俳優となった。松竹の大谷竹次郎は、演劇革新の情熱を持っていた左團次を新しい立派なスターに仕上げるために、劇作家岡本綺堂に依頼して「修禅寺物語」「鳥邊山心中」「番町皿屋敷」などの新歌舞伎を書かせた。これらの新歌舞伎の上演によって、左團次は評判を呼び、歌舞伎界に新しい風を取り入れた。しかし、1924 年 3 月に左團次は関東大震災から復興した本郷座で中里介山作「大菩薩峠」、谷崎潤一郎作「無明と愛染」、菊池寛作「浦の苫屋」など上演して観客の好奇心を惹いたが、「出来栄はむしろ失望の方であった」[7] と評判があまり芳しくなかった。『満洲日日新聞』の記者に対して、左團次は震災の影響で当時の歌舞伎界が「一頓座の形」や「混沌状態」になっていたことを語っている [8]。若い頃松居松葉（後の松翁）の案内によりヨーロッパで演劇視察を行い、ロンドンの俳優学校に学び、西洋演劇を研究していた左團次にとって、この中国公演は芸術創作の苦境を脱し、歌舞伎の新たな発展を図るための試みでもあるといえるだろう。

このように、国内外で大きく注目された中、左團次は壽美蔵、芝鶴、荒次郎などの一座を率い、8 月 5 日に東京を出発し、6 日に神戸で台中丸に乗って大連へ向かった。その行程は次の通りである。

9 日	大連に到着
11 ～ 19 日	大連劇場で公演 演目：「鞍馬山」「修禅寺物語」「繰り三番叟」「慶安太平記」「浄瑠璃供奴」（14 日から二の替）「箱根霊験躄仇討」「鳥邊山心中」「河内山」「賤機帯」（17 日から三の替）「綱館」「石切梶原」「南部坂」「鈴ケ森」「番町皿屋敷」「越後獅子」
21 ～ 23 日	奉天劇場で公演し、張作霖と会見 演目：「鞍馬山」「修禅寺物語」「繰り三番叟」「箱根霊験躄仇討」「慶安太平記」「浄瑠璃供奴」「鳥邊山心中」「河内山」
24 日	長春に到着
25 ～ 26 日	長春劇場で公演 25 日の演目：「鞍馬山」「修禅寺物語」「繰り三番叟」「慶安太平記」「浄瑠璃供奴」 26 日の演目：「勧進帳」「箱根霊験躄仇討」「鳥邊山心中」「河内山」「賤機帯」
27 ～ 28 日	ハルビンのノーブイテアトル（新舞台）で公演 演目：「鞍馬山」「番町皿屋敷越後獅子」
30 ～ 31 日	撫順公会堂で公演
9 月 2 ～ 3 日	安東劇場で公演 演目：「鞍馬山」「修禅寺物語」「繰り三番叟」「慶安太平記」「浄瑠璃供奴」「箱根霊験躄仇討」「鳥邊山心中」「河内山」「賤機帯」
16 ～ 18 日	釜山で公演
22 ～ 24 日	大連より天津行きの済通丸に乗船

24～28日　北京で辻聴花[9]の案内で観劇し、梅蘭芳主催の歓迎会に出席。波多野乾一[10]の紹介よって、京劇の名優である郝寿臣に自宅まで招待され、曹操の隈取を研究。「富連成」[11]の劇学校を見学した際に、練習に熱心な生徒に感心して寄付したいと申し込んだが、現金のかわりに食べ物にしてほしいと言われたため、28日に北京を去る前に辻聴花に依頼して羊肉の肉饅頭を生徒たちに送った。

29日以降　天津で黎元洪に会い、その邸にある椅子席の西洋風で設備も完全なる劇場に感心。上海で村田孜郎の案内で京劇の楽屋を見学し、演劇家である欧陽予倩が主催したパーティーに参加し、上海の名優である夏月潤と日中演劇交流について話す。

10月10日　長崎に帰国

各地の入場料は、地方によって少し異なる。例えば、大連では特等8圓、一等7圓、二等3圓50銭、三等2圓、四等1圓で、初日前に前売り切符はすでに完売した。奉天公演の入場料は特等9圓、一等8圓、二等4圓、三等2圓に変更されたが、団体割引と満鉄乗車料割引が適用されるようになった。1924年満洲の日本人の年収が253圓であった[12]ことから考えると、公演の入場料は現地の一般人にとっては決して安くないが、左團次一座の興行価値を示している。

満鉄は社員の観劇には各等二割引で特別待遇をし、また月給のうちから一時立て替えも行い、郵便局にも四ヶ月の月賦償還法を実施するなど、観劇の便宜を図った。『満洲日日新聞』は各地の公演の盛況を報じながら、高い入場料についてもしばしば話題として取り上げている。8月31日の紙面には左團次一座の公演を見るために、長春33軒の質屋では急に約165件の質入が増加したという記事も掲載されている。左團次一座の高い人気がうかがえる。

三、現地の反響

「東京大歌舞伎」と称した左團次一座の公演を見るために、満鉄の社員とその家族たちだけでなく、満洲に在住していた多くの観客が劇場に足を運んだ。8月25～26日の長春公演だけは総計1600人を超え、興行収入が1万圓に達した。本節では、満洲各地における公演がどうだったのか、新聞記事を引用して紹介するとともに、観客がどのように受け止めたのかも併せて紹介したい。

(1) 日本人の観劇

まず、現地の日本人観客の反響を見ていきたい。

左團次一座は満洲の至るところで盛大な歓迎を受け、各地の公演は満員の盛況を続けた。大連公演は現地の日本人から大いに期待が寄せられ、前売りの切符が完売した。左團次は初日の演目「修禅寺物語」で「何んとも云えぬ写実さで確かに苦心の痕が見え」、以前演じた時より「大分型なども換えて」[13]出演したことは、現地の日本人観客に評価された。

大連公演の2日目は、「遼陽奉天方面からの観客犇々押寄せ劇場は定刻前既に満員の盛況を呈し今や遅しと待つ間もなく正五時開幕され」、「左團次の忠弥は得意の場面にて特に異彩を放ち観

客は皆唾を飲んで其芸に魅せられた、劇場内は最初から最後まで緊張して水を打ったよう、皆静粛に見物した」[14] と報じられている。千秋楽の 8 月 19 日の夜に、関東長官の児玉秀雄も来場し、満鉄総裁の「安広社長などさえ辛うじて設けの席に就かれた程で真に立錐の余地も無く大入満員札止めと云う盛況であった」[15]。

『大連新聞』や『満洲日日新聞』は連日詳細な記事を掲載し、大連公演の盛況を報じている一方、左團次の演出を批判的に評価した記事もあった。『大連新聞』8 月 17 日 2 面の読者欄には、署名が「大連愛劇生」の「左團次に質す」という記事が記載され、左團次の演出を厳しく批判している。

> 在満邦人慰安の為大連劇場で出演せられつつある労や感謝の外はない愛劇生も二日目に其芸術を観覧したが悪かろう筈もなく特に慶安太平記の忠弥はお家芸の事故其得意たる忠弥の芸に就ては脚本に充分の考慮あるべき筈なるに非常識極まる行動に改悪されしが常に研究家の聞えある同優としては実に言語同断である夫れは忠弥住居の場で籐四郎より二百両の催促を受け其断りを云うに一味徒党の企てをペラペラと口外し連判状迄見せるのはどうであろう武士道を心得る忠弥が斯る微細な場合に一大事を漏らすは余程の馬鹿もので其後の同優は大馬鹿者に見えた堀端の忠弥は石を拾うさえ十分の注意を拂って居る印刷筋書にもそんな事は書いてない或は時間の都合かどうかは知らぬが<u>原作通り女房から洩すべきもので当の観客を馬鹿にしたものである同優の改悪の理由を明かに説明して貰いたい</u>愛劇生は当興行の成功を祈る一人ではあるが芸道研究上なれば何等憚らない。（下線は筆者による）

「慶安太平記」は河竹黙阿弥が 1870 年に初代市川左團次のために書き下ろしたものである。初代左團次は忠弥の役で爆発的な人気を得て、9 世市川団十郎・5 世尾上菊五郎とともに明治の三名優と称された。2 代目左團次は、1906 年に忠弥の芸を継承して上演を行ったが、その中の立ち廻りが気に入らなくて「出す時はいつも不承不承」[16] だったようである。

「大連愛劇生」は、忠弥がうっかり舅の藤四郎に幕府転覆の計画を漏らしたという部分に不満を覚え、左團次が原作を「改悪」して大連の「観客を馬鹿にした」と批判している。「大連愛劇生」は「原作通り女房から洩すべきもの」と主張しているが、黙阿弥の原作では酒酔いから起きた忠弥が藤四郎に謝金の催促を迫られ、計画を打ち明けて連判状も見せるという設定となっている [17]。「大連愛劇生」の主張した「原作」とは黙阿弥の原作のことではないが、大連公演で黙阿弥の原作に忠実な左團次の演出に違和感を持った観客・評論家がいたことは否定できないだろう。

一方、中国公演を決定する前の 5 月に、左團次は松竹座でも「慶安太平記」を上演した。「男性的なキビキビした処と、太い線で押して行くあの芸風とにぴったりと嵌っている」[18] と多くのファンから評価されつつも、『朝日新聞』では次のような意見が出ていた。

> ◇夜の人気は「慶安太平記」に集まっているが、丸橋忠弥に対する作者の理解は浅薄で時代も性格も現れていない、今日の観客に対しては種々な意味で餘りに単純過ぎる。陰謀露見の動機が二百両の借金の言わけであり、唯「禁酒宣伝劇」ともなってしまう。
>
> ◇左團次としても、この親譲りの脚本を演ずることは唯劇場政策に支配されたもので、内

面的に忠弥を表現することは困難に違いない、左團次のために新しい慶安太平記の作られむことを望む[19]

前述の「大連愛劇生」と同じように、『朝日新聞』の論者も忠弥が自ら藤四郎に秘密を口外した部分を批判しているが、「丸橋忠弥に対する作者の理解は浅薄で時代も性格も現れていない」という原作の欠点が故に、左團次は「内面的に忠弥を表現すること」ができないと主張している。さらに、神山彰が指摘しているように、初代左團次の演じた忠弥などの「当たり芸」は、「初演当時評判をとった」にもかかわらず、「大正という『教養』と『デモクラシー』と『理想』の時代に、あるいは昭和の『古典』や『伝統』を正統化し、『現代的意義』を見る時勢」に合わなくなる[20]。そのため、「脚本主義」で原作を尊重し、継承された「お家芸」を変更せずに演じた左團次は、必然的に近代的演劇の基準をもった評論家から厳しく非難された。

『満洲日日新聞』で「明治大正演劇史に於ける市川左團次の地位」を執筆し、左團次を高く評価した井田潑三も、大連公演の初日に「慶安太平記」を鑑賞した後に、「脚本として考えると、かくの如きものは現代的解釈の出来る様に大改作を施すか、或いは筐底深く蔵しておくべきもの」だと主張し、「此種のお芝居のほかに進むべき道」があって「一日も早く転換を試みてほしい」[21]と助言した。さらに、井田潑三は8月12日の午後に星ケ浦ヤマトホテルで左團次や一座の主要メンバーと現地の関係者を招待したため、彼が直接左団次に「慶安太平記」について意見交換をした可能性がある。大連公演の終了後、左團次は当初の予定通りハルビンを除いたほかの満洲地域でも「お家芸」である「慶安太平記」を上演したが、帰国後に上演せず、1928年ソ連公演の演目にも入れなかった。左團次による「慶安太平記」の上演は、1929年1月歌舞伎座の新春興行、および1936年9月明治座の「先代市川左團次胸像建設記念興行」のみであり、中国公演以降は井田潑三の主張したように「筐底深く蔵して」おいたのである。

(2) ロシア人の観劇

『満洲日日新聞』は現地の日本人の観劇を報道している一方で、満洲のロシア人の観劇にも注目している。8月14日夕刊2面の紙面には「露国領事から哈市の興行を勧める　纏まれば乗込もう」という記事が掲載され、「昨夜露西亜領事が大連劇場に左團次一座を見物しその芸風に感じて直に左團次に面会し哈爾浜に行く事を勧めた」と報じている。

ハルビンはロシアによって開拓された植民都市であり、1917年ロシア革命の後多くの白系ロシア人たちが移住して、商業や金融業の発展に伴って「東のモスクワ」と呼ばれるようになった。20世紀前半期は、日本を含めた33カ国から十数万人の移民がハルビンにやって来て、16カ国の政府がここに領事館を設置した。その中、1924年5月に中華民国北京政府とソ連両国は国交を回復し、7月にソ連はハルビンに総領事館を設置した。初代の総領事であるラキーチン（M. Ya. Rakitin）は10月までハルビンにいたが、『満洲日日新聞』の記事に言及されている「露西亜領事」は当時パグラニーチナヤ（Pogranichnaya）ソ連領事のキセリョーフ（D. D. Kiselev）である可能性が高い。キセリョーフは、1924年8月にハルビンにも滞在しており、10月からラキーチンの後任でハルビン総領事になり、1925～30年まで敦賀と函館で領事を務めた人物である。さらに、彼は1928年に函館領事として赴任する前、東京日日新聞社の記者のインタビュー

に答えて、自分の先祖が百年あまり前にロシアに渡った日本人であったという、興味深い事実を明らかにしている[22]。彼は日本文化に対して関心を持っていたことから、鑑賞した大連公演に非常に感心し、左團次にハルビンでの歌舞伎公演の開催を積極的に促した可能性があると考えられる。

一方、1924 年 7 月までにハルビンに居住した日本人はわずか 3371 人だけであり[23]、歌舞伎の上演にふさわしい劇場もなかったため、当初左團次と松竹は興行の開催地にあえてハルビンを入れなかった。大連公演を鑑賞したソ連領事の話で大いに意が動いて、左團次と松竹は長春での興行を終了した後にハルビンでも上演することを決めた。また、長春に到着した 8 月 24 日の夜に、左團次は現地の記者に対してハルビンの公演について次のように述べている。

> 最初日本劇場で一晩露西亜劇場で一晩の予定でしたが日本側は龍口銀行事件で財界に影響を来たしたとかで中止し新市街露西亜劇場で廿七日の夜一晩演じて廿八日は市中見物其晩立って帰って来ます座員は哈爾浜行には半数の四十余名の積りです。演出物も外国人向きとなると通しの芝居では不適当でダンマリ物を主として出す積りです。[24]

この記事を通して、左團次はハルビンに赴く前にすでに現地のロシア人観客のために、舞台や演目から注意を払い、工夫していたことが明らかである。このように、ハルビン公演は現地の日本人のために上演するというより、むしろ左團次がロシア人観客を強く意識しながら行った公演といってもよかろう。

『満洲日日新聞』8 月 23 日朝刊 5 面に「愈左團次が来る　露国人も興味を湧かす」という記事があり、歌舞伎の上演のための「設備不完全なる」ハルビンにおいて 8 月 28 日の一日限りの公演が決定され、日本人だけでなく、「露国人中にも非常に興味を以て期待する者が多い」ことを報じている。

ハルビン公演の入場料は 3 圓以上 10 圓までとなり、決して安くなかったが、公演の前日の 8 月 27 日午前中にすでに完売した。演目は「鞍馬山」と「番町皿屋敷越後獅子」であり、公演の当日「定刻に至るや在留邦人の大多数は犇々と劇場に詰め掛け中にも露国人二十余名を数えるという有様」であり、左團次一座の「花やかな演出に一同酔えるが如く其妙技を称えざるものはなかった」[25]という盛況であった。『満洲日日新聞』にはロシア人による観劇の体験談や感想を記した記事がなかったが、北村有紀子とダニー・サヴェリが共著した論文「異国趣味の正当化――一九二八年訪ソ歌舞伎公演をめぐって」（永田靖・上田洋子・内田健介編『歌舞伎と革命ロシア』（森話社、2017 年））では、北京大学で中国語を教えていた劇作家であるセルゲイ・トレチヤコフ（Sergei Tret'jakov）が左團次一座の公演に立ち会った可能性があると指摘している。今後同時期の満洲で発行されたロシア語新聞を調査して、左團次や歌舞伎に対するロシア人の考え方を明らかにしていきたい。

(3) 中国人の観劇

『満洲日日新聞』8 月 16 日朝刊 7 面には、「大勢の家族と恭親王の観劇　左團次夫妻と対面して身に付けた物を贈る」という記事が掲載され、「観客中には各方面の名士多数見えたる」4 日目の大連公演で、旅順より恭親王が夫人と多数の家族を引連れて観劇したことを報じている。こ

の記事で言及されている恭親王とは、清朝皇室の愛新覚羅溥偉である。清朝に関する重要な史料である『清稗類鈔』には「恭王嗜昆劇」の項があり、「喜观昆剧，能自唱，左右亦能和之。每遇小饮微醺，辄歌舞间作（恭親王は昆劇の鑑賞を好んで、自分も歌える。周りの人たちも彼に合わせて歌える。少し飲んでほろ酔いになると、いつも歌ったり踊ったりする。）」という記述から、彼が中国の伝統演劇である昆劇の愛好者で、相当な知識を持っていることがわかる。『満洲日日新聞』の記事では、「日本の劇に非常の興味を持ち居りこれまで是非一度観たいと思って居た」恭親王が、その日の夜にほかの予定があって最後までは観劇できなかったが、「日本演劇に就て話が聞きたいから是非自宅に来て貰いたい」と言い、身につけた物を記念品として左團次に送ったことが報じられている。

また、8月23日の奉天公演において、日本側のみならず、中国側においても「多大の人気を博し」、満洲を支配していた奉天軍閥の首領である張作霖の第五夫人とほかの軍閥の貴婦人も観劇した。さらに張作霖が公演を鑑賞しなかったが、翌日に左團次と山森三九郎を自宅に招待することも報じられている[26]。

さらに、『順天時報』9月5日5面に掲載された辻聴花の記事によると、『盛京時報』[27]の主筆で劇評論家の穆辰公（1885～1961）も左團次の奉天公演を観劇し、歌舞伎について自らの感想を次の四点にまとめている。

> 一、日本劇は完全に歌と舞踊の劇であり、音楽と役者の間の関係は密接になっている。これは中国劇と同じである。また、時には役者はしぐさと表情だけをし、伴奏団は役者の代わりに歌う。このような例は、中国の高腔にもある。
>
> 二、日本劇で演じる物語は、その大半が武士と美人の恋愛美談である。しかし、多くが情死の結末になる。この点においては、日本劇の特色であり、日本人の性情と風格を知ることができる。
>
> 三、日本劇の服装は、日本の昔の制度文物に一致しており、時代に忠実である。日本劇は中国劇より明瞭である。
>
> 四、今日の物質文明に至っても、日本帝国劇場と有楽座を除いて、すべての劇場は旧式であり、日本人の観劇様式は依然として維新以前の旧い習慣を保っている。日本人が保守であることが十分見てとれる。（原文は中国語であり、日本語訳は筆者による。）

穆辰公は1905年官費留学生として日本に渡り、早稲田大学で6年間の留学生活を過ごした。上述のように、彼は左團次の奉天公演を詳細に観察し、音楽や題材における歌舞伎と中国の伝統演劇の類似性を見出した。

満洲各地の公演を終えた後に、左團次一座は朝鮮半島に行き、9月22日まで公演を行った。当時、中国で第二次奉直戦争が勃発したため、左團次は計画の北京公演を中止し、一座を日本に帰国させ、左團次夫婦二人と山森三九郎だけが北京に行くことを決めた。命を懸けて北京に行きたかったのは、中国演劇を研究して梅蘭芳との親交を深めたいという理由が挙げられる。

四、梅蘭芳との親交

左團次が初めて梅蘭芳に会ったのは、梅蘭芳の1919年訪日公演の時であった。『東京日日新聞』1919 年 5 月 3 日の劇評は、政治や経済界の人々、知識人、そして左團次を含めた日本の歌舞伎界の著名な役者が訪日公演の初日に帝劇で上演された梅蘭芳の「天女散花」を鑑賞したことを報じている。左團次は「先年梅蘭芳が日本へ来られた節同氏の劇は拝見しました」[28] と語っていたが、当時梅蘭芳と話すことがなく、1919 年二人の交際についての記述もあまり残さなかった。

5 年の歳月を経て、左團次は梅蘭芳と再会の機を得た。『満洲日日新聞』8 月 23 日夕刊 2 面に「梅蘭芳が左團次を迎えて　北京で合同劇を開演する　日本劇を支那へ紹介のため」という記事が掲載され、「〔北京特電廿三日発〕市川左團次一行の来燕に対し梅蘭芳は大いに歓迎し左團次さえ承諾せば合同劇を北京第一の劇場に於て開演し日本劇を支那に紹介せん意向なり」と報じている。北京においても、辻聽花は『順天時報』8 月 24 日 5 面の紙面に「日本名伶日内来京誌喜」という記事を載せ、左團次が朝鮮公演を終えた後に北京で梅蘭芳と共演する意向を示したことを報じ、日中の二人の名優の共演に対する期待を記している。

左團次は 9 月 24 日に北京に到着し、25 日から辻聽花の案内で京劇を鑑賞した。26 日の夜、北京東四牌楼大條胡同の馮耿光氏邸で歓迎会に出席した。この歓迎会は梅蘭芳の主催で、出席者には波多野乾一や斉如山（1875 ～ 1962）といった京劇の研究者もいた（図 1）。左團次が京劇の隈取に非常に興味を持っていたので、梅蘭芳は辻聽花からそのことを知り、自ら収集した隈取を持参し、歓迎会で左團次に京劇の隈取について説明し、10 月訪日公演に「最も価値がある隈取の絵を数十点」持って行くことを約束した（図 2）。

左團次は北京で梅蘭芳との共演が実現できなかったものの、北京や上海で多くの中国劇を観劇した。さらに、帰国後に中国劇についての感想を次のように述べている。

> 私は支那の古典的な旧劇に非常に懐かしみを感じました。私は或る程度まで支那劇の浄化したものを日本劇に加味したいと思っています。私は今度の支那劇を観て日本の劇は支那から来たものであるとを（ママ）まざまざみせつけられたように感じました。支那では今旧劇と新劇と

図 1　梅蘭芳主催の歓迎会
出典：『演芸画報』1924 年 11 月号

図 2　梅蘭芳と隈取の絵を見る
出典：波多野乾一のご令孫・波多野真矢先生からご提供いただいた写真。

が鎬を削って居るが、科学を応用した新劇より旧劇の方が観客を呼んで居るようです。[29]

ここで言及されている「或る程度まで支那劇の浄化したものを日本劇に加味したい」という左團次の実践は、同年 11 月に本郷座で上演した「凱旋将軍」と思われる。「凱旋将軍」は、池田大伍が『征東全伝』中の「汾河湾」の一場を翻訳して創作したものである。「汾河湾」の主人公である薛仁貴は、妻の柳迎春と別れて高麗征伐の軍に身を投じ、軍功を立て帰郷する。家に戻った仁貴は、妻の寝台の下に男の靴があるのを見て、妻の不貞を疑い、問いつめる。迎春はその靴が別れた後に生まれた息子・丁山のものであると打ち明ける。仁貴は途中の汾河湾で誤って射殺した少年が息子であることがわかり、夫婦二人は悲しみに暮れる。左團次はその中で薛仁貴を演じたが、当時の評価はあまり高くなかった。歴史小説を多く手掛けた作家で、考証的な姿勢と物語としての面白さで高く評価された本山荻舟は、次のように左團次の「凱旋将軍」を評している。

> 支那土産という意味の支那劇といった風に、よほど際物的の当込みさえあるもので、作もそうなら舞台はそうではないとは云えません。ひっくるめて評すると、ただまとまっているという程度のものです。あの演出、あの調子、あの白廻し、あの科と、あのづくめで云っただけで、大低そうかと頷かれるほど、観客の目にも耳にも馴れ過ぎてきていると云う事は、早晩行詰まらねばならぬ前表を示しているものと云っては悪いでせうか。[30]

いうまでもなく、左團次は中国滞在を通して中国劇「汾河湾」の存在を知っていた。梅蘭芳の 1919 年と 1924 年訪日公演の演目に「汾河湾」は入っていなかったが、これは京劇の人気演目の一つであり、梅蘭芳が斉如山の助言によって伝統的演技方式に改革を加えた最初の試みでもある。梅蘭芳は柳迎春を演じて好評を博し、1930 年訪米公演の際に「汾河湾」を *One Shoe's Story* の題で上演した。「汾河湾」は梅蘭芳芸術の中で重要な演目の一つであると言ってもよい。

北京滞在の間、左團次は辻聴花の案内で中国の伝統演劇を多く鑑賞した。辻聴花は『順天時報』に 7 回にわたって連載した「日怜行踪雑記」で左團次が鑑賞した演目を記録したが、その中には「汾河湾」は入っていない。左團次は北京で直接梅蘭芳の「汾河湾」を鑑賞しなかったものの、「支那劇と梅蘭芳」と題した文章で「梅蘭芳は古典劇全盛の北京に居て古典劇を演りながらも古いものから新しいものを掴み出そうと腐心しています。」[31] と述べている。伝統演劇から新しい芸術的価値を見出し、さらに時代的要素を入れて伝統演劇の新たな発展を図るという点においては、左團次と梅蘭芳は共通する。二人は歓迎会で会見した時、伝統演劇の近代的発展について意見を交わした。このように、左團次が梅蘭芳との親交を通して、「汾河湾」における梅蘭芳の試みを知り、その影響を受けて帰国後に「凱旋将軍」を演出した可能性があると考えられる。

五、まとめ

以上、これまで注目されてこなかった左團次の 1924 年中国公演の実態について確認した。1928 年ソ連公演と異なって、この中国公演は満鉄の支援を受け、主に社員や満洲在住の日本人に対する慰安の目的で行われた興行であり、もっぱら外国人を観客とする「歌舞伎海外公演」で

はなく、松竹の「地方公演」として記録･認識されているようである[32]。しかし、『満洲日日新聞』や『大連新聞』など現地の新聞記事からは、「慶安太平記」のように、現地の日本人劇評家から厳しく批判された演目もあったものの、左團次一座が満洲各地で行った公演は多くの日本人観客に大いに感動を与え、高く評価を得ていたことがわかる。

また、左團次の中国公演は、現地のロシア人と中国人にも歌舞伎を鑑賞するチャンスを提供し、歌舞伎の魅力を伝えた。急遽追加されたハルビン公演で現地のロシア人観客のために、左團次は事前に外国人に理解しやすい演目や舞台などに工夫していた。左團次一座の公演を鑑賞したロシア人には、歌舞伎に興味を持った知識人や芸術家がいたことは疑いようがない。この 1924 年中国公演の経験が、4 年後のソ連公演に生かされた可能性もあるだろう。このように、歌舞伎を外国人に紹介する意味から、左團次の 1924 年中国公演が特別な意味を持っていると言い得るだろう。

この 1924 年中国公演は左團次の芸術生涯で重要な意味を込めた公演でもある。伝統芸術である歌舞伎と京劇の最初の共同公演は、梅蘭芳の 1919 年訪日公演で実現された。当時、帝国劇場で京劇と歌舞伎が一部、二部で続けて上演される形式をとっていた。左團次は同じ形式で北京における梅蘭芳との共同公演を望み、一座の主要メンバーと公演の合間に共同公演のために「戦闘準備」をするように稽古をしていた[33]。しかし、中国の国内戦争によって北京での共同公演は断念をせざるを得なかった[34]。左團次は命の危険を冒しても中国劇を研究するために北京に入った。ここで注目に値するのが、中国公演を通して中国劇を研究することの背後に、歌舞伎の新たな発展を図るという左團次の願望である。彼は辻聴花や波多野乾一や村田孜郎など中国の演劇や文化に詳しい「京劇通」の案内によって京劇を鑑賞・研究し、帰国後に京劇と歌舞伎を融合する新しい芸術形式の模索を始めた。

観劇のほかに、左團次は北京で京劇の役者を育成する劇学校を見学し、梅蘭芳や郝寿辰など京劇の名優と親交を深め、上海で多くの演劇関係者と交流を持った。梅蘭芳は左團次の行動に感銘を受け、二回目の訪日公演に出発する前に次のように述べている。

> 先日、市川左團次さんが、戦時わざわざ北京に参られましたのに、合同芝居が来なかったのは、非常に残念でしたが、両人堅く握手し、種々御話いたすことの出来ましたのは、日支両国劇界の連絡計画の為め、非常に好都合であったと思います。今度私が再び東京へ参りますについても、単に芝居をやるというばかりでなく、やはり両国劇界連絡のためにも出来るだけ協力してみたいと思っています。[35]

前述したように、左團次と梅蘭芳とは常に外国の演劇を積極的に学び、自国の伝統演劇を進化させることにおいて共通している。さらに、二人とも国境・言語を超えた日中両国の友好交流を実現するために精力的に活動した。梅蘭芳の話からもわかるように、左團次の中国公演は、同年に行われた梅蘭芳の訪日公演に影響を与えただけでなく、日中両国の文化･芸術の交流を促進し、日中両国の人々の相互理解と相互信頼を深めた。この公演が、日中両国の芸術交流のプロセスにおいて注目すべき出来事であるといっても過言ではない。

※本稿は、中国現代演劇研究会第23回研究会（2020年7月25日オンラインZoomによって開催）での発表「市川左團次の1924年中国公演と梅蘭芳について」に基づく。貴重なご意見を下さった先生方や、写真や文献資料をご提供くださった波多野真矢先生、加藤百合先生、佐々木幹氏に感謝申し上げる。
（各資料引用に際し、旧字体は新字体に、ルビはバラルビに改めた。）

【注】

1 市川左團次『左團次芸談』（南光社、1936年）159頁。

2 姜斯轶《中日传统戏剧交流的关键一环——20世纪20年代歌舞伎演员访华活动的多重意义》（《艺术学界》2019年第1期）、村上勝彦「古典文芸をめぐる日中文化交流―演劇・書物を中心に，大倉喜八郎の関わりにもふれて―」（学術研究センター年報特別号、2018年）

3 『大連新聞』は日本の租借地「関東州」の中心都市である大連で誕生した､民間人経営の日本語新聞である。1920年5月5日に創刊されてから、『満洲日報』との合併が発表された1935年8月6日にかけて、延べ15年3ヵ月計5470号発行されていた。当初は夕刊のみであったが、後に朝刊・夕刊ともに発行するようになった。発行部数は1929年当時最大で約75,000部（朝夕刊計）を誇った。（高媛「租借地メディア『大連新聞』と「満洲八景」」（『ジャーナル・オブ・グローバル・メディア・スタディーズ』第4号、2009年3月）を参照。）

4 『満洲日日新聞』はかつて日本の租借地であった「関東州」において刊行されていた日本語日刊新聞である。日露戦争後初代満鉄総裁である後藤新平の依頼により創刊される。1907年11月3日に創刊号を発行し、1944年3月に『満洲新聞』と合併するまで発行は続けられる。この間、日本の影響下にあった満洲各地で購読された。1935年9月『大連新聞』を買収し合併し、「大連に於ける唯一の邦字新聞」となり、「全満を通じての第一流新聞たるのみでなく、内地の新聞界にも五指を数ふるの一つ」と『大連市史』に記され、最盛期には41,000部を発行した。（湯原健一「『満洲日日新聞』1907（明治40）年記事件名目録」（『国研紀要』、2015年1月）を参照。）

5 『順天時報』は日本の民間外交団体である東亜同文会が創刊した中国語の新聞である。1901年末ごろ中島真雄は主催したが、その後日本公使館は引継ぎ、日本外務省の資金援助を受け、中国での機関報となる。満洲事変前夜の1930年に排日運動の影響を受けて廃刊するまで、北京で30年にわたって発行され、多くの中国人読者を獲得した。

6 「支那巡業に左團次の鹿島立　一行八十餘名の大掛りで大連から北京上海へ」、『日出新聞』1924年8月6日3面。

7 日本年鑑協会編『演劇年鑑1925年版』（二松堂書店、1925年）3頁。

8 「すこしも気障でない　劇壇の巨星左團次　満洲の発展に驚く」、『満洲日日新聞』1924年8月28日朝刊5面。

9 辻聴花（1868～1931）本名は武雄で、慶應義塾で学び、30歳で初めて訪れた中国で京劇に魅せられ、1912年ころからの20年間、北京に滞在して『順天時報』の劇評を担当した。

10 波多野乾一（1890～1963）は，上海の東亜同文書院を卒業後、1920年から大阪毎日新聞社、さらに時事新報社の北京特派員をつとめ、中国政治通のジャーナリストとして活躍しながら、多くの京劇名優と親交があった。著書には『支那劇五百番』『支那劇と其名優』『支那劇大観』などがある。梅蘭芳の1924年日本公演の際に、一行の案内役兼演出監督として同行し、公演演目の原案を出した。

11 1904年に設立された京劇養成所で、長い活動期間と多くの優秀な俳優を養成して、京劇界に大きな影響を与えた。

12 篠崎嘉郎『数字に現れたる満洲財界の状勢』（大連商工会議所、1929年）28頁。

[13] 「左團次の「夜叉王」大劇初日覗き」、『大連新聞』1924 年 8 月 13 日 2 面。

[14] 「遠く沿線各地から迄　観客犇々と詰めかけ　二日目の左團次一座」、『満洲日日新聞』1924 年 8 月 14 日朝刊 7 面。

[15] 「長官社長も見物した　昨夜の大連劇場身動きもならぬ大入り」、『満洲日日新聞』1924 年 8 月 20 日朝刊 7 面。

[16] 「エンゲイ書抜帳」、『読売新聞』1924 年 5 月 7 日朝刊 5 面。

[17] 河竹黙阿弥『黙阿弥脚本集　第 8 巻』（春陽堂、1920 年）244 ～ 250 頁。

[18] 「浅草の左団次　松竹座評判記」、『読売新聞』1924 年 5 月 13 日朝刊 5 面。

[19] 「松竹座見物」、『朝日新聞』1924 年 5 月 12 日朝刊 7 面。

[20] 神山彰「左団次という近代」（『歌舞伎　研究と批評』第 29 号、2002 年 6 月）46 頁。

[21] 井田潑三「左團次の初日」、『満州日日新聞』1924 年 8 月 12 日夕刊 3 面。

[22] 寺山恭輔「日本人漂流民の子孫と名乗るソ連外交官キセリョフ」（『窓』、2003 年 10 月）を参照。

[23] 「在哈の邦人数」、『満洲日日新聞』1924 年 8 月 17 日朝刊 5 面。

[24] 「すこしも気障でない　劇壇の巨星左團次　満洲の発展に驚く」、『満洲日日新聞』1924 年 8 月 28 日朝刊 5 面。

[25] 「盛況裡の左團次劇　露人も観覧す」、『満洲日日新聞』1924 年 8 月 31 日夕刊 3 面。

[26] 「張作霖氏が左團次を招待　昨夜は第五夫人が見物」、『満洲日日新聞』1924 年 8 月 24 日夕刊 2 面。

[27] 『盛京時報』は、『順天時報』を創刊した中島真雄が 1906 年に奉天で創刊した中国語新聞で、満洲で発行期間が最も長く、影響力も最も大きい新聞である。

[28] 辻聴花「日支劇界の提携　市川左團次氏談」、『北京週報』1924 年 9 月 28 日、16 頁。

[29] 「帰国した左團次　支那劇に就ていろいろ感想」、『朝日新聞』1924 年 10 月 11 日 7 面。

[30] 松居桃楼編『市川左團次』（京谷印刷屋、1941 年）209 ～ 210 頁。

[31] 『朝日新聞』1924 年 10 月 23 日 5 面。

[32] 『松竹百年史　演劇資料』（松竹株式会社、1996 年）889 頁。

[33] 「おとみさんが麻雀忌避の事」、『満洲日日新聞』1924 年 9 月 6 日朝刊 5 面。

[34] 中国で初めて京劇と歌舞伎の共同公演を実現したのは、1926 年守田勘彌の中国公演である。姚紅「一九二六年十三代目守田勘彌の中国公演について」、松田幸子・笹山敬輔・姚紅編著『異文化理解とパフォーマンス―Border Crossers』（春風社、2016 年）を参照。

[35] 辻聴花「梅蘭芳のことども　出発前の梅の実話」、『時事新報』1924 年 10 月 22 日。